



# インドの浄土教

梯 信 暁

はじめに

「浄土教」ということばは、一般に用いられる學術用語であるが、その概念内容は多岐にわたっていて、必ずしも明確ではない。ふつう「浄土」といえば「仏の清らかな国土」という意味であろう。しかし、サンスクリット語原典には、そのような意味での「浄土」をあらわすことばがみつからない。そもそも「浄土」とは「国土を浄める」という菩薩の修行を意味することばであった。それが「仏の清らかな国土」という意味で用いられるようになるのは、中国においてである。しかし、「仏の清らかな国土」という觀念そのものがインドに存在しない、というわけではない。大乘仏教の進展にともない、十方諸仏の存在が認められるようになる、仏の住む清らかな世界のありさまが盛んに語られ、その世界におもむくことを願う信仰がうまれてくる。阿閼仏の妙喜世界（『阿閼仏国経』）、薬師仏の浄瑠璃世界（『薬師本願経』）など様々な仏の世界が説かれる。報身の釈迦如来の国土としては、靈山浄土（『法華経』如来寿量品）や無勝莊嚴国（『涅槃経』光明遍照高貴徳王菩薩品）がある。弥勒菩薩の兜率天、観音菩薩の補陀

落山などに対する信仰も見逃せない。なかでも阿弥陀仏の極楽世界は、多くの大乘經典に言及され、中国や日本では、浄土といえは極楽を意味するほどに信仰を集めるようになる。小稿にとりあげるのは、この阿弥陀仏とその国土である。

ここでは、「阿弥陀仏を信仰し、極楽への往生をめざす宗教」を「浄土教」とよぶこととする。

『阿弥陀』とは、サンスクリット語 *Amitābha* (はかりしれないひかり) 無量光、*Amitayus* (はかりしれないのち) 無量寿) の訳語である。<sup>(1)</sup> 光明と寿命とが無量であるというのは、この仏の救済活動が、空間的・時間的に一切の制限をもたないということを意味する。十方世界の過去・現在・未来の生きとし生けるものを、無限の光の中におさめとって、極楽というさとの世界へと導く仏を、阿弥陀仏と名づけるのである。

『無量寿経』によると、久遠のむかし法蔵比丘が世自在王仏のもとで発願・修行して阿弥陀仏となつたとされ、爾来十劫を経た現在も、西方極楽世界にあって説法をつづけているという。法蔵の発願の主旨は、在家・出家、男女、貧富のへだてなく一切の衆生をやがて建立する清らかな世界に迎えとり、平等のさとりを完成させようとするところにある。この願いが成就して、極楽世界が出現し、法蔵は阿弥陀仏となる。阿弥陀仏の願いは、あらゆる世界の衆生のもとにとどけられ、仏の願いに応じたすべての生きとし生けるものが、その救いの手のなかにおさめとられるのである。

「極楽」とはサンスクリット語 *Sukhāvati* (楽あるところ) の訳語で、鳩摩羅什が『阿弥陀経』訳出の際に用いたことばである。『無量寿経』では「安楽」「安養」と訳される。その莊嚴のありさまは『無量寿経』『阿弥陀経』や世親の『浄土論』等に詳しく説かれている。国土は、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・磲磔・瑪瑙の七宝からなる。大地は平らかで、七宝の宝樹がたちならぶ。講堂・精舎は整備され、そこでは常に阿弥陀仏が説法している。その前庭には七宝の浴池があつて、八功德の水があふれ、いろとりどりの蓮の花が咲きみだれている。気候はおだやかで、清風

にのって花びらがふりそそぎ、快い音楽がひびいているという。

阿弥陀仏は、ゾロアスター教の光明神アフラマズダや、ヴェーダ聖典に登場する太陽神、原始仏教・部派仏教の経典に説かれる過去仏等とその起源を求められ、また、極楽の概念は、ゾロアスター教やユダヤの宗教、インドの梵天神話、原始仏教・部派仏教の転輪聖王神話等に由来するとされている。

しかるに、上述の如き「阿弥陀」という名にこめられたこの仏の救済の論理は、在家・出家を区別しない「万人の救済」をめざす大乘仏教の理念<sup>(2)</sup>に即応するものであり、阿弥陀仏信仰は、大乘仏教経典のなかで次第にその教理体系を整えてゆくことになる。

小稿は、浄土教が大乘仏教の体系のなかに位置づけられてゆく過程をうかがおうとするものである。とくに大乘仏教が強調する普遍的な万人救済の理念が、浄土教経典の教説や龍樹・世親の浄土教観に、どのように反映されているか、という点に注目して、インドにおける浄土教の展開を概観したい。

## 一、浄土教経典

初期の大乘経典のなかには、阿弥陀仏を扱うものが多い。なかでも『無量寿経』『阿弥陀経』『般舟三昧経』は、阿弥陀仏信仰を主題としている。また、『観無量寿経』は、四〜五世紀の成立で、インド撰述を疑う学者が多いが、中国・日本ではよく用いられた経典である。ここでは、この四部の経典をとりあげ、阿弥陀仏信仰が教理体系を整えてゆく過程において、大乘仏教の理念がどのような役割をはたしているのかをうかがいたい。

(1) 『無量寿経』

『無量寿経』は、阿弥陀仏の誓願を明かし、それに酬報する仏身・仏土の莊嚴と衆生救済の成就とを説く經典である。

原初形態は一世紀の西北インドで成立し、その後二〜三世紀にかけて増広・整備されたと考えられる。サンスクリット本・チベット訳が現存、漢訳は五存七闕と言われ、

- ① 『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』二卷（略称『大阿弥陀経』、呉の支謙訳）
- ② 『無量清浄平等覚経』四卷（略称『平等覚経』、後漢の支婁迦讖訳と伝わるが、魏の帛延訳とする説が有力）
- ③ 『無量寿経』二卷（略称『大経』『雙卷経』等、魏の康僧鎧訳と伝わるが、東晋の仏陀跋陀羅・劉宋の宝雲の共訳とする説が有力）

④ 『無量寿如来会』二卷（『大宝積経』卷十七・十八、略称『如来会』、唐の菩提流志訳）

⑤ 『大乘無量寿莊嚴経』三卷（略称『莊嚴経』、宋の法賢訳）

の五本が現存、安世高訳等七本が古佚とされる。現存諸本のなか、『大阿弥陀経』・『平等覚経』の二本を「初期無量寿経」とよび、『無量寿経』・『如来会』・『莊嚴経』・サンスクリット本・チベット訳の五本を「後期無量寿経」とよぶ。

『大阿弥陀経』『平等覚経』は、阿弥陀仏の誓願の数が二十四であることから「二十四願経」といわれる。この二本は訳出年代も古く、また、初期大乘仏教の代表的な經典である『般若経』の影響をうけていないことにより、最初期の大乗經典のひとつとされる。一方、サンスクリット本（四十七願）・『無量寿経』（四十八願）・『如来会』（四十八願）・チベット訳（四十九願）は、「四十八願経」の系統に属し、古訳二本よりも発達した形態を示している。般若思想の影響もみられる。『莊嚴経』は「三十六願経」で、「四十八願経」よりもさらにのちのものと考えられている。

る。

現存諸本中、最もよく用いられてきたのは『無量寿経』である。そこでまず『無量寿経』によって、この経の内容を概観しておきたい。

『無量寿経』上巻には、法蔵比丘が自在王仏のもとで発願し修行して、阿弥陀仏となる経緯を説く。誓願は四十八願で示され、仏身仏土の莊嚴や衆生救済の方法などが誓われている。

その第一・第二願には、

たとひわれ仏を得たらんに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ。

たとひわれ仏を得たらんに、国中の人・天、寿終りてのちに、また三悪道にかえらば、正覚を取らじ。

とある。法蔵比丘が建立しようとする仏の世界は、のちに安楽国（極樂）とよばれるが、そこは、悪道の縁を完全に離れたところである。もしそのことが実現しないようならば、仏とはならない、と誓っているのである。

第五願から第十願には、安楽国の人天には六神通（宿命通・天眼通・天耳通・他心通・神足通・漏尽通）を完成させよう、と誓われ、第十一願には、

たとひわれ仏を得たらんに、国中の人・天、定聚に住し、かならず滅度に至らざれば、正覚を取らじ。

と、仏果に至らしめることが誓われる。安楽国にむかえとられたものは、みな正定聚（仏果を得ることに決定した不退転の位）に定められ、やがて必ず仏の悟りへと導かれる、というのである。安楽国が仏道成就の場として設定されていることがわかる。

第十二・十三願には、

たとひわれ仏を得たらんに、光明よく限量ありて、下、百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、正覚を取らじ。

たとひわれ仏を得たらんに、寿命よく限量ありて、下、百千億那由他劫に至らば、正覚を取らじ。

と、光明無量・寿命無量の徳をそなえた仏となることが誓われている。この願いに酬報して、「阿弥陀」という名の仏が出現する。そして第十七願に、

たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称せざれば、正覚を取らじ。というように、その名は十方の諸仏によってほめ讃えられるのである。これによって、阿弥陀仏の救済が十方の衆生に伝えられる。

次の第十八・十九・二十願には、衆生救済の方法が誓われている。古来、生因の三願とよばれてきたものである。

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、心を至して信樂し、わが国に生ぜんと欲すること、乃し十念に至るまでせんに、もし生ぜざれば、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とを除く。

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、心を至して発願し、わが国に生ぜんと欲せんに、寿終るときに臨んで、たとひ大衆と圍繞してその人の前に現ぜざれば、正覚を取らじ。

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、わが名号を聞きて、念をわが国に係け、もろもろの徳本を植えて、心を至して回向し、わが国に生ぜんと欲せんに、果遂せざれば、正覚を取らじ。

さまざまな機根のものが、救済の対象となっていることがわかる。あらゆるものを安樂国にむかえとろうとするのである。第二十二願には、

たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土の諸菩薩衆、わが国に來生すれば、究竟してかならず一生補処に至らん。

その本願の自在に化すところ、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の國に遊んで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめ、常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せんものを除く。もししからざれば、正覚を取らじ。

と、安樂國に生まれたものは、一生補處、すなわち命終わるときに即座に仏果を完成するという位に定められることが誓われている。ただし、普賢菩薩のように、菩薩の位に身を置きつづけることによって、自由自在な救済活動を展開しようとするものに対しては、その意志が尊重される。阿弥陀仏のすくいひは、画一的なものではないのである。

四十八願にもりこまれた法蔵比丘の願ひとは、「無限の光明と寿命とを得て、障りなく一切の衆生を救済できる仏となり、苦しみのない清らかな世界を建立して、すべての生きとし生ける者をそこに迎えとり、平等の悟りへと導きたい」ということである。この願ひが成就しなければ、決して仏の座にはつかない、と誓っているのである。

その誓願が成就して、法蔵比丘は光明無量・寿命無量(4)の徳をそなえた阿弥陀仏となる。それ以来十劫を経た現在も、阿弥陀仏は、自ら建立した西方安樂國にあつて説法をつづけているという。その阿弥陀仏と國土の莊嚴が詳しく示されて、上巻がおわる。

下巻には、四十八願に酬いて実現する衆生救済のありさまが説かれる。その冒頭に、第十一・十七・十八願の成就が説かれている。

それ衆生ありてかの國に生ずるものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆえはいかん。かの仏國のなかには、もろもろの邪聚および不定聚なければなり。十方恒沙の諸仏如来は、みなともに無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃歎したまふ。あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜し、乃し一念に至るまで、心を至して回向(5)し、かの國に生ぜん願ずれば、すなはち往生を得、不退転に住す。ただ五逆と誹謗正法とを除く。

諸仏の讃嘆する名号を聞いて信じ、往生を願うものは、安樂國に迎えられて正定聚に住し、やがて仏果を成就せしめられる、というのである。

次に、救済の対象となる衆生が、その能力によって三段階に分けて示され、あらゆる機根の者が往生し、悟りへと導かれてゆくさまが説かれる。この一節は古來、三輩往生段とよばれている。



ついで、往生して悟りを得た者たちが、十方の世界におもむいて衆生を救済してゆく様子を説く。その活動をほめたたえて、経を聞く者に安楽国への往生をめざすよう勧めるのである。

ところが、愚かな凡夫たちは、我欲のつくりだす差別の世界、煩惱にまみれたまよいの世界の生存に執着し、清らかな平等のさとりの世界をめざそうとしない。阿弥陀仏のことを疑い、その願いに応じようとしないう。<sup>(6)</sup>そこで重ねて信がすすめられる。いかなる愚か者にも救いの道をひらいておくため、たとえ仏教が忘れ去られてしまったとしても、この教えだけはいつまでものこしておこう、という釈尊の誓いを述べて、経を結んでいる。

以上『無量寿経』には、阿弥陀仏の成仏の因果と、衆生の往生の因果とが明かされ、ここに阿弥陀仏信仰は、教理体系をもつに至ったのである。

さて、『無量寿経』の救済論の基本姿勢は、ひとつには四十八願、ことに生因の三願のうえに看取できる。ここでは、救済の対象を、「十方衆生」すなわち「あらゆる世界の生きとし生けるもの」としている。この三願に相当するのは『大阿弥陀経』では、第五・六・七願であるが、そこには、「八方上下のもろもろの無央数の天・人民および蜎飛・蠕動の類」<sup>(7)</sup>とあって、阿弥陀仏の救済が、神々や人々から虫の類にまで及ぶことが示されている。その一切衆生が、阿弥陀仏によって安楽国へと導かれ、正定聚に定められるのであるが、救済される側に科された条件は、さほどきびしいものではない。『無量寿経』第十八願では「まことの心をもって仏のことは信じ、安楽国に生まれたいと思う心を、わずか十たびでも起すこと」であり、第十九願では「菩提心をおこし、さまざまな善行を修め、まことの心をもって安楽国に生まれたいと思うこと」、第二十願では「仏の名前を聞いて、安楽国に思いをかけ、さらにさまざまな善行をおさめ、まことの心をもって、その善行の報いを往生という結果に振り向けるよう願って、安楽国に生まれたいと思うこと」となっている。いずれも厳しい修行を求めてはおらず、この経が救済しようとしているのは、主として、仏の教えに随順する凡夫であることがうかがわれる。ただしそれぞれに微妙な違いがあって、各願が想定

している衆生の機根に差別がつけられていることは事実である。

その違いは、下巻の三輩往生段に反映されている。上輩は出家の菩薩、中輩は在家のままさまざまな徳行をおさめたもの、下輩は徳行をおさめる能力はないが仏法を信じ一心に往生を願うものである。これは救済の対象となる此土の衆生に、さまざまな機根があることを示したもので、むしろ、一切衆生をあまねく救済しようとする立場をあらわすものと考えてよからう。

問題は、それぞれの機根によって、安楽国における得果に差別を認めるのか否かというところにある。『無量寿経』では、上輩は「安楽国に往生して不退転に住し、智慧勇猛、神通自在である」といい、中輩は「往生して不退転に住し、その功德智慧は上輩に次ぐ」、下輩は「往生を得て、その功德智慧は中輩に次ぐ」と説かれていて、往生後の得果に差別があるように解される。

古訳の『大阿弥陀経』『平等覚経』では、上輩は即座に真実の浄土に往生して不退転を得るが、中・下輩は仏の教えに疑惑をいだくがゆえに、浄土の辺地にとどめおかれるといわれ、明らかに得果に差別が認められる。

一方、新訳の『如来会』は、三輩段というかたちでの明確な教説ではないが、「菩提心を発して、無量寿仏を専念し、諸善根を殖え、発心回向して往生を願うもの」、「菩提心を発して、専念とまではいかずとも無量寿仏を念じ、善根を回向して往生を願うもの」、「大乘の清浄心をもって、ほんの十たびでも無量寿仏を念じて往生を願い、法を聞いて信を得たもの」が往生してゆくさまを説く。旧訳の三輩段にあたるものであろう。ここでは、三者ともに、「安楽国に生まれて不退転を得、無上菩提を証す」と説かれ、安楽国における得果に関して差別は認められない。また、『莊嚴経』にも、機根のことなる三者の往生が説かれるが、やはり三者ともに「阿耨多羅三藐三菩提を退転せず」という果が用意されていて、得果においては差別はない。救済における平等性の追求という方向で、この経自体が思想的進展をとげていることがうかがわれるのである。

ところで、『大阿弥陀経』『平等覚経』が三輩段にとりあげた疑惑の衆生に関して、『無量寿経』はこれを三輩段ではなく、のちに釈尊の勸誡を示すなかに胎化段とよばれる一節を設け、そこでとり上げている。仏智を疑いながらも、なお罪福を信じ善行をなして往生を願うものは、「胎生」というかたちで安楽國に生まれ、智慧も開かれず、見仏聞法もできない。しかし、仏智を信じたいうえで諸々の功德を修めるならば、安楽國に「化生」し、すぐれた智慧を完成する、と説く。<sup>(12)</sup>これは仏智への、そしてその表現としての本願への「信」をすすめる教説である。衆生の心のありかた、信の有無が問われているのである。仏語に随順して仏智を信するならば、いかなるものも安楽國に往生することができ、すぐれた智慧を獲得して正定聚に住せしめられる、というのである。

『無量寿経』は、「信」を強調することによって、万人の救済を実現するための理論をうちたてた。在家の信者であっても、安楽國に往生して正定聚に住し、仏道を完成することができる、というわけである。これによって阿弥陀仏信仰は、大乘仏教の体系のなかに位置づけられたと考えるのである。

## (2) 『阿弥陀経』

『阿弥陀経』は、阿弥陀仏の依正莊嚴を示して極樂への往生をすすめるとともに、六方諸仏の証誠護念を説いて浄土法門の眞実を主張する經典である。

一〇二世紀に西北インドで成立したとみられ、サンスクリット本・チベット訳が現存する。漢訳は、鳩摩羅什訳『阿弥陀経』一卷、玄奘訳『称赞浄土仏摂受経』一卷の二本が現存する。羅什訳がよく用いられ、『小経』と略称される。全体を要約すると、次のようになる。

西方十万億仏土の彼方に極樂という美しい世界がある。教主は、光明無量・寿命無量の徳をそなえた阿弥陀仏で

ある。仏となってより十劫をへた現在も、説法をつづけている。極楽に往生すれば、やがてかならず仏となる身にさだめられる。極楽への往生をめざして、阿弥陀仏の名号を一心に執持せよ。そうすれば、臨終に仏の来迎を蒙り、極楽に往生できる。あらゆる世界の仏たちが、この教えの眞実を証明し、この教えにあずかる衆生を護るであろう。それゆえ往生をねがうものはみな不退転に住することができるのである。

『無量寿経』に説かれた阿弥陀仏や極楽国土の莊嚴と、さほどのちがいはない。往生の因として示された「執持名号」は、『無量寿経』の聞名思想に通ずるものである。往生後是不退轉の位にさだめられるという教説も、『無量寿経』と共通する。

『阿弥陀経』の特徴は、六方諸仏の証誠護念を説いて、浄土の法門が眞実であることを強調するところにある。『阿弥陀経』は、浄土教を「難信の法」ととらえ、信順をすすめるために、諸仏の証誠を説くのである。説相はことなるが、「信」を重視するという立場そのものは、『無量寿経』と同様である。

『阿弥陀経』には、極楽の莊嚴がくわしく説かれる。経の大半をこれに費やすといっても過言ではない。そのなかに、

池のなかの蓮華は、大きき車輪のごとし。青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光ありて、微妙香潔なり。<sup>(14)</sup>

というような文言がある。宝池莊嚴を説く一節である。極楽の池を飾るいろとりどりの蓮華は、ひとつひとつが、その持ち味のままでひかりかがやいている。青い蓮華は青くひかり、白い蓮華は白いままでかがやくのである。画一的な光ではない。個性の輝きである。しかも全体として均整のとれたすばらしい風景だ、という。

これは、極楽の花の描写を通じて、大乘仏教のめざす理想の社会像を明かそうとしたものである。そもそも仏教は、和合の社会の実現をめざしている。眞の和合は、眞の平等によってもたらされる。仏教は、あらゆるいのちに平

等の尊厳を認める宗教である。大乘仏教はこの点をとくに強調する。絶対の尊厳をもつひとつひとつのいのちが、それぞれの個性を最大限に發揮して、しかも全体の調和を崩さない、そしてまた、互いの個性を認めあい、ともに成長してゆけるような社会。大乘仏教は、そんな社会の実現をめざしているのである。

『阿弥陀経』における池中蓮華の描写は、救済の場としての極楽の平等性を表現するものと考えてよからう。

### (3) 『般舟三昧経』

『般舟三昧経』は、般舟三昧の法、すなわち、現在諸仏と行者とが面前に対峙する境地に至る精神統一の法を説く經典である。

般舟三昧 (Pratyutpanna-buddha-sammukha-avasthita-samadhi) とは、①「現在の仏陀の面前に立つ菩薩の三昧」または、②「現在の諸仏が悉く菩薩の前に立つ三昧」という意味に解される。サンスクリット語としては①のほうが自然であるが、漢訳には「現在諸仏悉在前立三昧」とあって、②の解釈がなされているようである。

紀元後二〇―一五〇年頃の成立とみられてきたが、原初形態はそれよりややさかのぼり、一世紀の成立とする説が有力である。サンスクリット本は断片のみで、チベット訳が完本で伝わる。漢訳は、

①『般舟三昧経』三卷(略称『三卷本』、後漢の支婁迦讖訳)

②『般舟三昧経』一卷(略称『一卷本』、後漢の支婁迦讖訳と伝わるが、後代の中国で『三卷本』から要約されたもの)

③『拔陂菩薩経』一卷(未完本、訳者不明)

④『大方等大集経賢護分』五卷(略称『賢護経』、隋の闍那崛多訳)

の四本が現存する。

般舟三昧は、一切諸仏を觀想する三昧であるが、『般舟三昧經』の中核にして最も成立の早い「行品」(『賢護經』は「思惟品」)では、それは西方須摩提(Sūthavati 極樂)の阿彌陀仏を憶念することとされている。閑静なところで心を集中し、一日一夜乃至七日七夜、一心不乱に阿彌陀仏を憶念すれば、阿彌陀仏が目の当たりに現ずる。たとえ昼間には見えずとも夢のなかで見ることができるといふ。ところが、「行品」以外のところには阿彌陀仏に関する記述はみえず、現在十方諸仏を觀想の対象とし、修行の期間も九十日を要するというような記述になっている。「行品」とそれ以外の品とが成立事情を異にしていることがうかがわれよう。

いずれにしても、この經は、現世における見仏を目的としている。そして、現世にいながら、阿彌陀仏の教えを聞くのである。『三卷本』に、「命終わってかの世界に生まれてから見るのではない」と説かれるように、往生による見仏をめざしているのではない。「つねに阿彌陀仏を念ずることによって阿彌陀仏國に生まれることができる」といふ文言もあるが、往生はあくまでも見仏の結果として自然にそなわるものであって、往生を目的として説かれたのではない。

『般舟三昧經』は、三昧經典として大乘仏教のなかに位置づけられる。この点で『無量壽經』や『阿彌陀經』とは異質の經典である。

#### (4) 『觀無量壽經』

『觀無量壽經』は、阿彌陀仏の依正莊嚴相及び極樂往生人の諸相を觀想する方法を説く經典である。

四〜五世紀の成立とされるが、インド撰述を疑う学者が多く、中央アジアか中国でできたとする説、その両方にま

たがる地域で段階的に成立したとする説などがあって未だ判然としない。サンスクリット本・チベット訳はなく、漢訳は班良耶舍訳『観無量寿経』一卷のみ現存する。『観経』という略称が一般的である。

マガダ国の太子阿闍世が、父王を害し、母韋提希を幽閉する。その韋提希の要請により釈尊の説法が始まる。韋提希は阿弥陀仏の極楽世界に往生する方法をたずね、こたえて釈尊は三福・十六観の法を説く。

三福とは世福（世俗の善行）・戒福（小乗の善行）・行福（大乘の善行）、十六観とは①日想、②水想、③地想、④樹想、⑤八功德水想、⑥総観想、⑦華座想、⑧像想、⑨徧観一切色身想、⑩徧観世音菩薩眞実色身想、⑪観大勢至色身想、⑫普観想、⑬雜想観、⑭上輩生想、⑮中輩生想、⑯下輩生想である。①～⑬は定慮の中で極楽の依正莊嚴相を観ずる方法を示す。⑭～⑯は三輩九品段とよばれ、上品上生から下品下生に至る九段階にわたって、様々な機根の者が極楽に往生してゆくさまを説く。

『観無量寿経』も『般舟三昧経』とおなじく、三昧經典としての性格をもつが、成立年代が下るため、『無量寿経』や『阿弥陀経』の影響をうけていて、極楽への往生をすすめることにも力が注がれている。往生極楽を願う韋提希を、そして浄業を修せんとする未来世の一切凡夫を、極楽へと導くために、往生極楽の方法を説く、という説法の形態をとっているのである。この経がみずから、「この経を、△極楽国土と無量寿仏と観世音菩薩と大勢至菩薩とを観ずることを説く経▽と名づけ、また、△悪業の障りを取りのぞいて仏のまゝに生まれることを説く経▽と名づける<sup>(17)</sup>」と名乗っているとおりでである。

『観無量寿経』の三輩九品段は、『無量寿経』の三輩段を承けたものであろうが、『無量寿経』よりも広い範囲の機根が扱われている。

上品上生人は、至誠心・深心・回向発願心の三心を具足して、戒律を守り、大乘經典を説誦し、六念（念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天）を行じ、極楽への往生を願うような、機根のすぐれた大乘の行者である。このような者が

命終わるときには、阿弥陀仏および観音・勢至をはじめとする無数の聖衆の来迎にあずかり、極楽に往生して即座に無生法忍のさとりを得ることができる。

以下、上品中生・上品下生人も、大乘の行者であるが、上品上生人にくらべてすこしづつ機根が劣ってくる。それに応じて、来迎の聖衆、往生後の得果に優劣が生ずる。

中品上生・中品中生人は、小乗の行者である。『無量寿経』の三輩は、出家・在家にわたるが、いずれも菩提心を発した大乘仏教徒であった。『観無量寿経』は、救済の対象を小乗の徒にまで広げているのである。かれらは、極楽に往生して小乗の四果（須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果）を証するという。

中品下生人は、親孝行などの世間の善をおこなって一生をすこし、臨終をむかえて阿弥陀仏の法にふれ、往生を願うようになったものである。臨終におよんで入門した初心者である。かれに用意されたのも、中品上・中生人と同じ小乗の果である。

さらに下品では、悪人の往生が扱われている。下品上生・中生・下生と次第に悪業が重くなってゆく。それでも臨終に阿弥陀仏の法に出逢い、教えにしたがって念仏すれば、罪が消えて極楽に往生できる、という。もっとも悪業の重い下品下生人は、五逆十悪をはじめ悪のかぎりをつくしたものである。したがって臨終には苦にせめたてられるが、そのなかで善知識の勧めに従い、十念を具足して「南無阿弥陀仏」と称えることによって、蓮華のなかに迎えとられて極楽に導かれる。十二大劫という長い時間華内に包まれているが、やがて蓮華が開き、極楽の菩薩の説法にあずかり、菩提心を発す、と説かれる。<sup>18)</sup>

五逆罪とは「殺父・殺母・殺羅漢・出仏身血・破和合僧」をさし、真実の仏法を謗るといふ謗法罪とあわせて、仏教でもっとも重い罪である。提婆達多や阿闍世の犯した罪で、かならず阿鼻地獄に墮ちるといわれる。

『無量寿経』の第十八願、およびその願成就文では、五逆・謗法ものは救済の対象から除外されていた。これに



対し、『観無量寿経』は、阿闍世の逆悪の物語から説きはじめ、五逆罪をおかした極悪人の往生を認めて、経を結んでいるのである。この逆謗除取の問題は、中国・日本においておおきくとりあげられ、浄土教研究の中心課題のひとつとなる。ともあれ、『観無量寿経』が悪人の救済を説くことに主眼をおく経であることは認めてよい。

ところで、曇無讖訳の『涅槃経』は、一闍提 (icchantika 断善根) の成仏を認めたことで有名である。『涅槃経』は「一切衆生悉有仏性(あらゆる者が成仏の可能性をもつ)」を主張する経典である。この経も、阿闍世の物語を用いて、悪人の救済を説く。中期の大乗経典である。『観無量寿経』がどこで編纂されたのかはわからないが、阿闍世の逆悪の説話は『涅槃経』を承けたものであろう。『涅槃経』は如来藏思想によって悪人にも開悟の道のあることを示し、『観無量寿経』は阿弥陀仏の本願念仏によって悪人にも往生が可能であることを説く。教理的根拠はことなるが、ともに悪人救済の論理をうちたててることを目的とした経典である。

『観無量寿経』の三輩九品段には、修行の進んだ菩薩から極悪人まで、あらゆる機根の衆生の往生が説かれるが、此土における機根の優劣にしたがって、来迎の聖衆や往生後の得果には明確な差別がつけられている。この点は、後期の『無量寿経』がめざした「平等の得果」という立場とは異なる。しかし、『無量寿経』が想定したよりもずっと広い範囲の機根を、阿弥陀仏による救済の対象としているところに、『観無量寿経』の救済論の特徴をとらえることができるのである。

## 二、龍樹・世親の浄土教論書

『無量寿経』『阿弥陀経』『般舟三昧経』などの初期大乗経典に示された阿弥陀仏と極楽世界に関する教説は、龍樹

や世親の論書中に言及されている。ここではこの両者を取りあげてみたい。

### (1) 龍樹

龍樹 (Nāgārjuna 一五〇—二五〇頃。龍猛・龍勝とも訳される) は初期大乘仏教教理の大成者である。南インドの出身で、はじめバラモン教を学んだが、欲望が苦の原因であることをさとって、仏教に帰依したという。上座部の三蔵に通暁したが満足できず、天下を周遊して深奥の法門を求めた。ヒマラヤの山中で老比丘より大乘仏教経典を授けられ、また、大龍菩薩の導きで海中の宮殿より大乘甚深の経典を見いだしたと伝えられる。以後、大乘経典の研究と大乘仏教の宣布とにつとめた。南インドを中心に活動したとされ、晩年は、アーンドラ王国のシャータバーハナ王朝の保護を受け、ナーガールジュナコンダで没したといわれる。伝記史料として、鳩摩羅什訳の『龍樹菩薩傳』等がある。

主著『中論頌』は、『般若経』の思想に依拠して、釈尊の根本思想「縁起」の法を「空」の立場で示したものである。縁起を「不生不滅、不常不断、不一不異、不来不去」の八不中道で示し、諸法は無自性空であることを主張している。『十二門論』は、真偽未詳ながら『中論』の入門書的な著作である。『大智度論』は、『大品般若経』の注釈書で、訳者鳩摩羅什の見解がかなり盛り込まれているといわれるが、初期大乘仏教の教理を網羅するものとして重要である。その他『空七十論』『広破論』『廻諍論』『六十頌如理論』『宝行王正論』『菩提資糧論』『大乘二十頌論』等が龍樹の著作として伝えられている。

『十住毘婆沙論』は、『十地経』の初地・第二地の注釈書である。龍樹の真摯を疑う学者もあるが、ほぼ龍樹の作と考えてよいものである。すくなくとも偈頌の部分は龍樹の作であろう。サンスクリット本・チベット訳はなく、鳩

摩羅什による漢訳十七巻のみが伝わる。仏陀耶舎が暗記していた原文を口誦し、鳩摩羅什と共同で翻訳したともいわれる。第三地以降を欠くのは、仏陀耶舎が口誦しなかつたため、というが疑わしい。『十地経』の注釈書とすれば確かに未完であるが、在家・出家の菩薩の実踐行が系統立てて解説されており、大乘菩薩道を説く文献としては完結している。

三十五品からなるが、その第九「易行品」には阿弥陀仏に関する記述があり、浄土教論書として別出されることがある。

『十地経』をはじめとする諸經典に説かれた菩薩の行位は、のちに五十二位等のかたちを整備され、凡夫が仏道に趣き、次第に仏果を完成してゆく過程が明かされる。五十二位とは、十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺である。その十地の第一「初地」は、阿惟越致地・歡喜地・不退転地等といわれ、聖者の仲間入りをする地位である。菩薩の修行は、まずこの初地をめざして行われる。ところが初地に至るには、「諸・久・墮」の三難があつて、行者の行く手を阻んでいる。すなわち、諸々の難行を行ずるといふ行体の難、久しくしてはじめて得ることができるといふ時劫の難、修行途中で怠れば二乗に墮するという退墮の難である。そこで「易行道」として疾く阿惟越致に至る方法を教示することが請われ、信方便易行の法が説かれる。諸仏諸菩薩を念じ、その名を称えることによって不退転を得ることができるといふのであるが、なかでも阿弥陀仏の名を称えるべきことが力説されている。そこには、

阿弥陀仏の本願はかくのごとし、「もし人われを念じ、名を称して、みずから歸すれば、すなわち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得」と。このゆえにつねに憶念すべし。<sup>(18)</sup>

とあり、つづいて偈をもって阿弥陀仏の功德を列挙し称賛している。初期大乘經典に説かれた阿弥陀仏に関する記述を集約したものであろう。ととのつた教理が示されているわけではないが、浄土教を、凡夫救済のための易行の法門ととらえて、大乘仏教の体系のなかに位置づけていることはたしかであろう。

## (2) 世親

世親 (Vasubandhu 四〇〇—四八〇頃。天親とも訳される) は、瑜伽行唯識教学の大成者である。伝記史料としては、真諦訳の『婆藪槃豆法師伝』等がある。

瑜伽行派は、『解深密経』『大乘阿毘達磨経』等の中期大乘經典や、弥勒 (Maitreya) 造とされる『瑜伽師地論』『大乗莊嚴経論頌』『中辺分別論頌』等の論書に依拠して唯識思想を展開する学派である。唯識とは「一切は識をなしては存在しない」という説であり、主観 (見分) も客観 (相分) もともに識であることをいう。

瑜伽行派の教理を大成するのは、無着 (Asanga 三九五—四七〇頃)・世親の兄弟である。西北インド、ガンダーラ地方のプルシャプラ出身で、ともに上座部系部派の教学を極めたのち、大乘仏教に回入したという。無着は、『撰大乘論』『大乘阿毘達磨集論』等を著して唯識学を大成し、唯識説に基づく大乘仏教の実践体系を確立した。

世親は、兄無着の勧めによって大乘仏教に帰依し、瑜伽行派の論書の研究をはじめた。『唯識三十頌』『唯識二十論』等の著作は、弥勒以来の阿頼耶識説を整備して、識の転変による認識の生成を明らかにしたものである。唯心論を「空」の立場で理解して、「遍計所執性・依他起性・円成実性」という唯識三性説を確立し、また、仏陀論や修道論にも独自の見解を示して、唯識学の教理体系はここに完成するのである。

世親は、説一切有部の論書『大毘婆沙論』の研究者としても有名である。その著『阿毘達磨俱舍論』は『大毘婆沙論』の注釈書であるが、説一切有部の教理を巧みにまとめながら、経量部の立場から批判をくわえたところがある。

そのため衆賢 (Saṃghabhadra) がカシュミールの有部の立場から『阿毘達磨順正理論』を著して反駁する。ともに名著であるが、阿毘達磨研究の主流となるのは、『俱舍論』の方である。

世親はまた、『大乘莊嚴經論頌』『中辺分別論頌』『金剛般若經論』『攝大乘論』等の弥勒・無着の論書に対して注釈書を著している。そのほか、『十地經論』『妙法蓮華經優波提舍』『無量壽經優波提舍』等は、唯識学の立場で大乘經典を注釈したもの、『大乘成業論』『大乘五蘊論』等は、俱舍と唯識学との架橋的な論書である。

『無量壽經優波提舍』は、浄土教教理の体系化をめざした最初の論書である。世親の著とされるが、疑う学者もある。サンスクリット本・チベット訳はなく、北魏の菩提流支訳『無量壽經優波提舍願生偈』一巻が現存するのみである。以下『浄土論』という略称を用いる。

『浄土論』は、韻文形式の「偈頌」と散文形式の「長行」とからなる。偈頌ではまず、世親自身の阿弥陀仏への帰依と、安樂国への願生の意が表明されたのち、安樂浄土、阿弥陀仏、そして浄土の諸菩薩の功德莊嚴が明かされる。長行では、偈頌の内容に即して五念門（①礼拝・②讚歎・③作願・④觀察・⑤廻向）の修行が説かれている。すなわち、

①身をもって阿弥陀仏を礼拝し（礼拝）

②口で阿弥陀仏の名をほめたたえ（讚歎）

③心を専注して安樂国土に往生しようと願い（作願）

④智慧をもって仏国土、阿弥陀仏、そして仏土の諸菩薩の功德莊嚴を觀察し（觀察）

⑤その功德を一切衆生に回向して、ともに安樂国に往生することを願う（回向）  
 というかたちで、浄土教の自利利他の実践が明かされるのである。

ことに「觀察門」の説示に力が注がれ、

仏国土莊嚴功德十七種（①莊嚴清淨功德成就、②莊嚴無量功德成就、③莊嚴性功德成就、④莊嚴形相功德成就、⑤莊嚴種種事功德成就、⑥莊嚴妙色功德成就、⑦莊嚴觸功德成就、⑧莊嚴三種功德成就、⑨莊嚴雨功德成就、⑩莊

徹光明功德成就、① 莊嚴妙声功德成就、② 莊嚴主功德成就、③ 莊嚴眷属功德成就、④ 莊嚴受用功德成就、⑤ 莊嚴無諸難功德成就、⑥ 莊嚴大義門功德成就、⑦ 莊嚴一切所求満足功德成就

仏莊嚴功德八種 ① 莊嚴座功德成就、② 莊嚴身業功德成就、③ 莊嚴口業功德成就、④ 莊嚴心業功德成就、⑤ 莊嚴大眾功德成就、⑥ 莊嚴上首功德成就、⑦ 莊嚴主功德成就、⑧ 莊嚴不虛作住持功德成就

菩薩莊嚴功德四種 ① 不動而至功德、② 一念遍至功德、③ 無相供養功德、④ 示法如仏功德

と、觀察の対象となる三嚴二十九種の莊嚴功德が明かされ、それが自利利他の功德を成就した第一義諦妙境界相であることを説く。

五念門は、極樂への往生をめざす修行の体系として、整ったかたちで示された最初のものであろう。五念門の素地となった教説として、『華嚴經』に説かれた普賢菩薩の十大願とか、唯識論書の諸処にみえる十波羅蜜などが指摘されているが判然としない。五念門の中心は、第三作願門と第四觀察門である。作願門は「一心專念に往生極樂をめざし奢摩他 (samatha 止) の行を修すること」であるといい、觀察門は「智慧をもって觀察し、毘婆舍那 (vipaśyanā 観) を行ずること」であると説く<sup>(20)</sup>。この止・観の修行によって得られた功德を、一切衆生に廻向し、ともに往生をめざしてゆくのである。

すなわち、第一義諦妙境界相である浄土を観ずることによって諸法の実相を知り、智慧 (柔軟心) を完成してゆくとともに、一切衆生を救うとともに安樂國に生まれるために利他の廻向を實踐し、慈悲心を成就してゆく。自利利他の二利を成就することによって、三種の菩提門相違法 (我心・貪着自身・無安衆生心・供養恭敬自身心) を遠離し、三種の菩提門に随順する法 (無染清浄心・安清浄心・樂清浄心) を満足して、四心 (智慧心・方便心・無障心・勝真心) を成就するが、それは、妙樂勝真心という一心に帰する。こうして往生浄土の因が完成する。

浄土に往生すれば、五念門に対応して五功德門 ① 近門・② 大会衆門・③ 宅門・④ 屋門・⑤ 園林遊戯地門 が完成

してゆく。①④は自利、⑤は利他の完成で、ここに自利利他円満の仏果が成就するのである。

ところで、五念門の中心をなす「止・観」はともに大乘仏教の重要な行業であるが、とくに瑜伽行派の論書では、聞薰習・意言・無分別智と唯識性に悟入してゆく瑜伽行は、具体的には止観の行であると示されている。五念門は、瑜伽行派の教理によって組織された、願生行者の修行の体系である。

また、観察門に説かれた三嚴二十九種の莊嚴功德のなか、とくに国土莊嚴十七種には、『解深密經』『撰大乘論』『仏地經論』に説かれた十八円満<sup>(21)</sup>(真諦訳では十八円淨)の影響が顕著である。瑜伽行派は自性身・受用身・變化身の三身説によって仏身を論ずるが、その受用身所居の浄土の相として示されたのが十八円満である。『浄土論』は阿彌陀仏の浄土を受用土ととらえ、観察の対象としての浄土の莊嚴を、瑜伽行派の浄土観にもとづいて示しているのである。

『浄土論』は、往生極樂のための修行を、瑜伽行派の実践の体系のうえに位置づけようとした論書といえよう。

### おわりに

インドにおこった阿彌陀仏信仰は、大乘仏教の発展とともに、次第にそのかたちを整えてゆく。阿彌陀仏の性格、極樂浄土の莊嚴、往生人の機類、往生のための修行、往生後の活動等々、さまざまな問題がとり上げられ、大乘仏教の立場に則して解決され、その結果「浄土教」とよばれる宗教が、大乘仏教の一形態として成立するのである。浄土教は、「万人の救済」という大乘仏教の理念をことに強調する教えとして、大乘經典のなかに位置づけられていった。インドにおいては、龍樹や世親が、みずから立ち立てた教理体系のうえで浄土教をとらえている。しかし、『無量寿經』や『阿彌陀經』が主張しようとした救済の思想が、明確に教理化されたとは言いがたい。この問題は、浄土教が

中国に伝わって以降に持ちこされる。このことは、中国の浄土教が『観無量寿経』の流布とともに盛んになっていったことと無関係ではない。凡夫救済の論理を究明しようとする浄土教の研究は、中国において本格化するのである。

## 【注】

- (1) 阿弥陀仏の原語をサンスクリット本にあたると、無量寿経では Amitābha が主、Amitāyus は付随的であるのに対し、阿弥陀経では Amitāyus が主、Amitābha は名義段に出るのみである。このことから Amitābha 信仰と Amitāyus 信仰とは起源を異にするのではないかと考える学者もある。
- (2) 原始仏教や部派仏教の經典によると、解脱涅槃の果をめざす世間道を行するのは出家の修行者のみである、とされる。在家信者には、比丘や教団に財物を布施し、在家の五戒をたもつなどの福德を積んで、天上界に生まれることをめざせ、と説くのみである。このような立場を批判する在家信者によって推進されたのが大乘仏教運動である。在家・出家がともに仏果に至ることのできる修道体系を確立したところに大乘仏教の意義が認められるのである。
- (3) 『無量寿経』卷上(『大正藏』第十一卷、二六七頁下段)二六九頁中段。以下、『大正藏』二二・二六七下二六九中と表記する。
- (4) ただし、「初期無量寿経」では、阿弥陀仏の寿命は極めて長久であるが、やがては入滅すると説かれる。いわゆる「有量の無量」である。これに対し、「後期無量寿経」では、入滅のない真の無量寿の仏が説かれる。この経の発展段階において、救済者としての阿弥陀仏の完全性が追求されてきたことがうかがわれる。
- (5) 『無量寿経』卷下(『大正藏』二二・二七二中)
- (6) 釈尊が、此土の凡夫の三毒煩惱を誡め、五悪をとどめ五善をすすめる教説は、古来、三毒五悪段とよばれている。『大阿弥陀経』『平等覚経』『無量寿経』には存し、サンスクリット本をはじめ他本にはない。ただし『無量寿経』の三毒五悪段は、原典からの翻訳ではなく、古訳の記述を踏襲したものと考えられる。さらには、この一段のインド成立を疑う説もある。

(7) 『大阿弥陀経』卷上(『大正藏』二二・三〇一中)

(8) 『無量寿経』卷下(『大正藏』二二・二七二中)下



- (9) 『大阿弥陀経』卷下(『大正蔵』一二・三〇九下〜三二一上)、『平等覺経』卷三(『大正蔵』一二・二九二下〜二九二下)
- (10) 『如来会』卷下(『大宝積経』卷十八)、『大正蔵』一一・九七下〜九八上)
- (11) 『莊嚴経』卷中(『大正蔵』一一・三三三中〜下)
- (12) 『無量寿経』卷下(『大正蔵』一一・二七八上〜中)
- (13) 『阿弥陀経』(『大正蔵』一一・三四七中〜三四八上)、『称讚浄土経』は、六方に四維をくわえて十方諸仏の証誠を説く(『大正蔵』一一・三五〇上〜三五一上)。
- (14) 『阿弥陀経』(『大正蔵』一一・三四七上)。なお、『無量寿経』卷上、華光出仏を説く一段に、これとよく似た記述がある。また衆宝の蓮華、世界に周満せり。一一の宝華に百千億の葉あり。その華の光明に無量種の色あり。青色に青光、白色に白光あり。玄・黄・朱・紫の光色もまたしかなり。曄曄煥爛として日月よりも明曜なり。一一の華のなかより三十六百千億の光を出す。一一の光のなかより三十六百千億の仏を出す。身色紫金にして相好殊特なり。一一の諸仏、また百千の光明を放ちて、あまねく十方のために微妙の法を説きたまふ。かくのごときの諸仏、各各に無量の衆生を仏の正道に安立せしめたまふ(『大正蔵』一一・二七二上〜中)。
- ここでは、一々の蓮華の光が十方の世界に至り、無数の仏となって人々に法を説き、仏道へと導く、と説かれる。
- (15) 『般舟三昧経』(三卷本)卷上(『大正蔵』一三・九〇五上)
- (16) 『般舟三昧経』(三卷本)卷上(『大正蔵』一三・九〇五中)
- (17) 『観無量寿経』(『大正蔵』一一・三四六中)
- (18) 『観無量寿経』(『大正蔵』一一・三四四下〜三四六上)
- (19) 『十住毘婆沙論』卷五(『大正蔵』二六・四三上)
- (20) 『浄土論』(『大正蔵』二六・三三一中)
- (21) たとえば玄奘訳『撰大乘論本』卷下(『大正蔵』三一・一五一上)には、
- ① 顕色円満 ② 形色円満 ③ 分量円満 ④ 方処円満 ⑤ 因円満 ⑥ 果円満 ⑦ 主円満 ⑧ 輔翼円満 ⑨ 眷属円満  
 ⑩ 住持円満 ⑪ 事業円満 ⑫ 撰益円満 ⑬ 無畏円満 ⑭ 住処円満 ⑮ 路円満 ⑯ 乘円満 ⑰ 門円満 ⑱ 依事円満  
 の十八円満があげられている。

## 【参考文献】

## ◆通説

- ・藤田宏達『原始浄土思想の研究』岩波書店、一九七〇年。
- ・信楽峻磨『浄土教における信の研究』永田文昌堂、一九七五年。
- ・長尾雅人『中観と唯識』岩波書店、一九七八年。
- ・坪井俊映『浄土教汎論』隆文館、一九八〇年。
- ・平川彰・梶山雄一・高崎直道編『講座・大乘仏教5―浄土思想』春秋社、一九八五年。
- ・平川彰『浄土思想と大乘戒』(平川彰著作集【第七卷】)春秋社、一九九〇年。
- ・中村元・早島鏡正・紀野一義『浄土三部経』上・下、ワイド版岩波文庫、一九九一年。
- ・香川孝雄『浄土教の成立史的研究』山喜房仏書林、一九九三年。
- ◆『無量寿経』に関して
  - ・藤田宏達『大無量寿経講究』東本願寺出版部、一九九〇年。
  - ・大田利生『無量寿経の研究―思想とその展開―』永田文昌堂、一九九〇年。
  - ・藤田宏達『無量寿経―阿弥陀仏と浄土―』(浄土仏教の思想【一】)講談社、一九九四年。
- ◆『阿弥陀経』に関して
  - ・桜部建『阿弥陀経―真実の名のり(阿弥陀)―』(浄土仏教の思想【一】)講談社、一九九四年。
- ◆『般舟三昧経』に関して
  - ・末木文美士『般舟三昧経』をめぐって』(藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教)平楽寺書店、一九八九年。
  - ・梶山雄一『般舟三昧経―阿弥陀仏信仰と空の思想』(浄土仏教の思想【二】)講談社、一九九二年。
- ◆『観無量寿経』に関して
  - ・末木文美士『観無量寿経―観仏と往生』(浄土仏教の思想【二】)講談社、一九九二年。
- ◆龍樹に関して
  - ・山口益『般若思想史』法蔵館、一九五一年。
  - ・梶山雄一・上山春平『空の論理(中観)』(仏教の思想【3】)角川書店、一九六九年。

- ・小川一乘『空性思想の研究』文英堂、一九七六年。
  - ・江島恵教『中観思想の展開』春秋社、一九七九年。
  - ・武邑尚邦『十住毘婆沙論研究』百華苑、一九七九年。
  - ・中村元『ナーガールジュナ』(『人類の知的遺産』一三) 講談社、一九八〇年。
  - ・仏教思想研究会編『仏教思想6・空』上・下、平楽寺書店、一九八一・一九八二年。
  - ・平川彰・梶山雄一・高崎直道編『講座・大乘仏教7―中観思想』・『講座・大乘仏教2―般若思想』春秋社、一九八二・一九八三年。
  - ・壬生台舜編『龍樹教学の研究』大蔵出版、一九八三年。
  - ・瓜生津隆真『ナーガールジュナ研究』春秋社、一九八五年。
  - ・武内紹晃『龍樹―中観思想と菩薩道―』(『浄土仏教の思想』三) 講談社、一九九三年。
- ◆世親に関して
- ・深浦正文『唯識学研究』上・下、永田文昌堂、一九五一年。
  - ・上田義文『唯識思想入門』あそか書林、一九五四年。
  - ・勝又俊教『仏教における心識説の研究』山喜房仏書林、一九六〇年。
  - ・山口益『世親の浄土論』法蔵館、一九六六年。
  - ・服部正明・上山春平『認識と超越へ唯識V』(『仏教の思想』4) 角川書店、一九七〇年。
  - ・船橋尚哉『初期唯識思想の研究』国書刊行会、一九七六年。
  - ・横山絃一『唯識の哲学』平楽寺書店、一九七九年。
  - ・武内紹晃『瑜伽行唯識学の研究』百華苑、一九七九年。
  - ・平川彰・梶山雄一・高崎直道編『講座・大乘仏教8―唯識思想』春秋社、一九八二年。
  - ・三枝充恵『ヴァスバンドゥ』(『人類の知的遺産』一四) 講談社、一九八三年。
  - ・武内紹晃『無量寿経優婆塞提舍願生偈』西本願寺安居講本、一九八六年。
  - ・勝呂信静『初期唯識思想の研究』春秋社、一九八九年。
  - ・武内紹晃『世親―唯識思想と浄土論―』(『浄土仏教の思想』三) 講談社、一九九三年。

